
Discrimination

Circlecafe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i s c r i m i n a t i o n

【Nコード】

N1750P

【作者名】

C i r c l e c a f e

【あらすじ】

世界の有力国の共有海域の島のひとつ。

『一世紀前に発見された冥力の運用訓練施設』として作られたその学園に、転入した貧乏人『坂崎 茜』。

傍若無人な彼女の学園生活物語。

ぷろろーぐ

彼女の技は、溜息が出る程美しい。

全校の生徒が見つめる、この広い闘技場。

淡い金色の柔らかい髪を揺らし、白透きとおるような指で空中に描き出される　流線型の魔方陣。

その清流のような青の色彩が、観客に一声も出させない雰囲気を出す。

上下共に白を基調とされた制服が、彼女が特別な生徒である事を示す。

「さ、転校生さん。あなたの魔法を見せて」

流すような視線を対峙する生徒に向ける。

バサバサの肩をすぎるくらいの黒い髪。

この寒い季節に半袖の制服。

転校生といわれるだけあって、この戦いを見る一般生徒達とデザインも違う。

「うるせえよ白いの」

そう言うと、汚れてボロボロのスニーカーで地面を蹴り前にでる。

「くす…」

一瞬で間合いを詰めてきたこの猪突猛進な転入生に、白い制服の彼女は勝気な笑みを浮かべる。

「よっしやあああああ！」

一同は、その一瞬の決着を理解できていないようにざわめく。

両手をあげ全身で一撃勝利を表現する転校生。

這い蹲るのは白い制服。

しばらくの間の後、金髪の彼女のファンなのか、悲鳴のような声があちこちから。

その敗北はそれ程この学園に衝撃を与えた。

意識を混濁させているのか、担架で運ばれていく。

真っ白な制服の襟に目立つ血。

闘技場は、歓声では無い声で満ち溢れて、それを振り切るように勝利者が大声を、

「よし！次いいいいいい！！！」

次の相手がそのグラウンドに出る。

背丈の小さい、黒い長い髪の子。

高校生には見えないとも言える幼さの少女が出てくると、試合開始のサイレンが鳴る。

貧乏人ロックンロールとその1

『冥泉式法術専修学園』

仰々しい名前を持つこの学園の敷地は、世界のいくつかの有力国の共有海域に浮かぶ島の一つを全て占有する。

大小様々な島の浮かぶこの地域において、三番目に広いこの土地に作られた学園の生徒数は意外にも少なく数百程度。

創立された目的は、実に明快であり『一世紀前に発見された冥力の運用訓練施設』というもの。

単純に言ってしまうえば『魔法』のようなものを訓練する為の特殊学校だ。

「いってええええ！」

そんな学園の転入生、『坂崎 茜』は全身に走る痛みで飛び起きる。

「お？」

目に入るものは低い天井。

自分が二段ベッドの下の段にいる事に茜はすぐに気がつく。

「あ、ようやくおきたね！」

起床してすぐには聞きたくないような澁刺とした声。

首から後頭部に響く痛みに、怪訝な顔でその声の主を見る。

赤毛で眼鏡。モニターがいくつもついたコンピューターの前の椅子を、こちらに向けて笑顔。

「おはよ、よう寝たね」

初対面の彼女が座ったままキャスターを転がし近づいてくる。

「私はレイラン。あんたと同部屋、よろしくね」
差し出された握手を無視したまま茜は今の状況を確認する。

学生にあてられた寮。
その一室だ。

「いやゝ強いなあんだ」
レイランと名乗った少女はクルクルと椅子で回りながら感心している。

「…………あああああ!!」
しばらく考えた茜が急に叫ぶ。

「な!! なんよ!？」

驚いて椅子から落ちそうになる。

「負けたのか!! …おいレイロン! あのチビどこだ!!」

いきなり椅子の背もたれを掴み引き寄せ聞く。

名前を間違えている事につっこめないくらいの気迫。

夜もだいぶ遅く、寮の廊下は無人だ。

「だからあの子は一年で…」

廊下をガスガスと品なく進む茜にひきずられながら、レイランは半ば諦めたように説明する。

「一年だと!」

立ち止まる茜。

「ん…まあスーパー一年生だけど」

茜は三年生という転入している。

この学園では一番上になる自分が負けたとなると、よりそれが彼女に火をつける。

「一年はどこだ!」

レイランは溜息。

三年生の寮から少し歩いた所、立派な外装の一年寮。

「なんつーチビの癖に贅沢なところだ！」

むろん、三年の寮も立派な作りではあるが、茜はそれすら目に入っていないらしい。

「で、どこだあのチビ」

「わかるわけないやろ！」

レイランはちよつと怒っている。

「え…ちょ…何？」

茜はそのまま寮にズカズカと入っていく。
仕方なくそれを追う。

ドカ！！

レイランは血の気が引いた。

蹴っ飛ばされたのは一つの寮室の扉。

「おい、チビはどこだ」

びっくりして目覚めた一年生のパジャマの襟首を掴み聞く。

「や…やめなって！」

庇うように間に入るレイラン。

「ああ…すいません！」

二段ベッドの上の生徒まで急いで降りてきて直立する。

原因はレイランの制服。

一年、二年、三年と制服の違う学園故の事。

それに加え、今日の闘技場での戦いを彼女達も見ているのだ。

冷や汗をながしながら緊張している一年生。

茜に掴まれていた子は最早半泣き。

「あ…あはは…ごめんね…っ…このやろ…」

茜をひきずり外に出ようとするが動かない。

「あ、あのさ瑠璃ちゃんの部屋どこかな？」

諦めたようにレイランが彼女達に聞く。

「お、ありがとう」

そう言い廊下に出ると、何人かの生徒が逃げるように各自の部屋に戻る。

「あのな…茜…」

さすがに説教をしようとする、目の前には異様なドア。

作りは他と同じ、ただそこに周囲の壁まではみ出すように描かれているのは、細かで複雑な文様。

「これ…魔法陣…」

人を寄せ付けぬ雰囲気の黒で描かれたそれにさすがに絶句する。

茜が倒したあの白い制服の生徒が中空に描いたものと同じような…ただ違うのは、発するオーラの禍々しさ。

ドゴ!!!

「ばかっ…うわっ!!」

レイランがひっくりかえる。

先ほどと同様、壁を蹴飛ばした茜が自分の上に乗っかっている。

「なんだこれ!!」

飛び起きた茜。

「あのな、陣はわかるやろ、それに弾き飛ばされて…ってあんた!」
それでも構わず茜はさっきよりも大きく蹴っ飛ばす。

「っ…てえ……」

また弾き飛ばされて打ち付けた頭をさする。

「……………何してるの」

こもる様な小さな声。

長い黒髪の少女、瑠璃。

「あ！てめえチビ！」

茜の探し人がそこに。

「茜…やばいかも…」

レイランが少し身を引く。

瑠璃の足元に広がる、黒紫の魔方陣。

壁の模様と同じような威圧感。

「さてと！」

立ち上がり構える茜。

空気が張り詰めゆっくりと重々しく回る。

「君もチビ…」

言われた茜が少し呆けた顔をする。

対面する瑠璃と茜の身長はほとんど変わらない。

「……………てめえ！！！」

顔を真っ赤にした茜が拳を握り飛びかかる。

「やめなさい！！！」

突如の大声。

「坂崎茜！メイ・レイラン！！！」

グラマラスな女性が怒り心頭でこちらに足早に歩いて来る。

「あ？じゃますん…うわっ！！！」

以上に震えだす茜の体。

「あんたたち：騒ぎだと聞いて来てみたら：」

「あの：セシリア先生：その」

言い訳を死ぬほどうしたいレイランの横を抜け、先生と呼ばれた女性が茜の前に立つ。

「お：体がうごかね：ってまて！」

一発。

大きく殴られ、廊下の奥の壁をぶち破り外に消える茜の体。

貧乏人ロックンロール〜その2〜

「ああ〜ねみい！」

顔を腫らした茜が不機嫌そうに言う。

「あんたのせいや〜」

レイランはもっと不機嫌だ。

あのあと気絶した茜の意識が回復するまで二時間。

説教が三時間。

窓の外が明るくなっていったときの絶望感は半端なかった。

二人が廊下を歩いていると生徒達がざわつく。

茜だ。

昨日の試合で一躍有名になった転入生を一目見ようと乗り出す皆々。

「はあ…」

とぼっちりで注目されるレイランは堪らない。

「半袖だからかな」

違う制服、それに寒い季節なのに半袖、裸足に直で穿いた汚いスニーカー。

「違うわ…ま…それもあるけどな」

3年2組の教室の戸をひらくとこれまた大きなリアクション。

「半袖で何が悪い！」

入った瞬間茜がキレる。

一番手近な生徒に殴りかかろうとした瞬間、茜の小さな体が宙に浮く。

「おい…」

昨晚の教師、セシリアが茜の後ろ首を持ち上げる。

「な……先生……自己紹介しようとしただけだって」
とりわけ筋肉質なわけでも無い腕に軽々と掴まれた茜が苦笑いで言う。

「あゝ今日から転入生だ。以上」

簡単な紹介と共に、雑に放され膝から着地する茜。

「いってえ……」

学園に来てからはじめての授業。

理論的な話は茜を眠りに誘う。

茜を氣にしてヒソヒソ話す生徒が怒られるのも氣にせず堂々と眠ろうとする。

「坂崎茜！」

ガゴン！

直撃する分厚い本。

「いってえええええええ！」

そんな茜の騒動で目を覚まし、胸を撫で下ろすレイラン。

「坂崎茜、暴れたら約束は無しだからな」

そう言い残しセシリアが教室を出て行く。

放課。

その時間が、いまや学園中が気にしている存在をほかっておくわけが無い。

「ねえ！ここ来る前はどこ？」

一人が話しかけると続々集まる。

鬱陶しさに、拳を握るが先程のセシリアの言葉を思い出し我慢する。

「ねね！先生の言ってた約束って何？」

いきなり核心的な質問をされて、苛立つ茜。

「あ？」

目で威嚇してひるませるが、興味先立つ若い集団を止められない。

「なんで半袖？暑がり？」

「昨日すごかったね！よくあの人を一撃で…」

「あのだ！名前なんていうの？」

答えなくとも続く質問。

バン！

机を強く叩き茜は教室を出て行く。

一瞬静まり返る生徒達。

「な…なん…」

その視線はレイランに向けられる。

「ねね！レイラン！あの子なんなの？」

今度はレイランが質問攻めだ。

教室同様、興味を向けられる廊下を抜け、校舎の入り口で手に入れた静けさ。

「はあ…あと四本か」

スカートのポケットから取り出したのは煙草。
ライターを出す、なかなか火がつかない。

カシッ…カシッ…

時折火花を散らす乾いた音。

「はい」

「お…ありがと」

そうしている時横から差し出されたライターに感謝をする。

「って…てめえ！」

ライターの貸主、昨日一撃で倒したあの白い学生服。

「何いきりたってるのかしら？」

そう言いながら自分の煙草に火をつける。

「何してんだよ白いの」

茜の質問に煙を吐き出して答えない。

「おい、聞いてんだろ」

昨日からの苛立ちが、表情に表れていく。

「八つ当たり？それに私の名前はアリア。アリア・レティホルン。
白いのじゃないわ」

バン！

茜が近場の壁を叩く。

「あら、みつともない。何をそんな苛立つの？」
手を出してはいけない。そうしたら約束が。

「相手してあげましょうか？」

アリアが煙草を床に捨て踏み潰す。

「約束の事なら心配しないでいいわ、そうね：私に勝ったら、昨日瑠璃にかけてたぶんも特別に通してあげるわ」

昨日の負けをなんとも思っていない強気な発言。

「ほ：ほんとうか！」

反面、茜は意外なくらい上機嫌だ。

「：ほんとよ：」

そんな茜にアリアが少し戸惑う。

「：煙草消して」

アリアが急に小声。

「んあ？」

シュ：

茜の口から煙草を奪い、素手で握りつぶすアリア。

「お：おま：」

残り少ない煙草を消されて茜が怒りかけると、人の足音が聞こえる。

「何してんだおまえら」

セシリアだ。

「いえ、もう一度約束をかけて戦おうという事になりました」

自分が床に捨てた煙草を足で隠しながら答える。

「いいんじゃないか」

それだけ言うとセシリアは階段のほうに歩いていく。

「さてと！文句言うなよ！」

移動した、運動場のような場所で茜が構える。

二時限目が開始したともあって他には誰もいない。

「お楽しみ」

そう言うとアリアが空中に花びらをまく。

「ふざけてんのか？お嬢様はバラの香りってか！！」
そんな余興めいた行為を無視して茜が踏み込む。

パシュン…

「あつつ…」

足が止まった。

何か腕に熱をかんじて、本能的に立ち止まったのだ。
花びらはまだ空中に停滞している。

「そ、バラは高貴なもの以外近づけないのよ」

アリアが手首を返すとふわりふわりとその場で揺れる白い花びら。

「…なんだ？」

一瞬酔ったようなその景色に目を奪われていると、その一枚が太腿に触れる。

「あっちい！！」

思わず飛びのくその温度。

「ほんと、無知識ね」

ペト…

一枚が足首に貼りつく。

「あつつうううううう！！　こら！！　あちい！！」

剥がれないその花びらは骨まで響くような熱。

皮膚が焦げる嫌な匂い。

「あなたの負けよ」

茜が後ろの気配に振り向く。

気持ち悪いくらいの無数の花びらが眼前に。

「…っ…」

ドン

驚きよろめいて情けなく尻餅をついてしまう茜。
この前は圧勝した相手なのに。

「昨日はおつかれさま」

茜の顔に、アリアの拳がめり込む。
返り血がその真っ白な袖を汚す。

「くそ…」

悔しさ、流れる鼻血はそのままに地面の砂を握り締めた。

貧乏人ロックンロールその3

「うわっ！どうしたん！！」

寮に戻ったレイランがびっくりするのわけはない。

真っ赤になった枕を抱いた茜が部屋の真ん中に座り込んでいる。

「いや：鼻血とめるものがなくて」

アリアの拳はかなり効いたようで枕を押し付けてとめたらしい。

「ティッシュあるじゃん：」

呆れるレイラン。

「だって：それ：おまえのじゃん」

意味の分からない返答に目が点になる。

「え：ティッシュくらい：いいで？」

いきなり涙目になる茜。

「う：うええええええ：食費がああああああ」

子供のように泣きじゃくる。

「ど：そうしたん？」

二度目の同じ言葉が出る。

「あの花びらかうそいいや初回のときは無かったな」

レイランにもらったティッシュで鼻を拭きながら茜はうなづく。

「だから半袖か」

またうなづく。

茜の親はアリアの親が経営する財閥の下請けの下請け。

ここに来る前に仕事が減ったらしい。

そこでの交換条件、アリアに勝てば学費を出す、そしてもう一人用意した相手に勝てば食費を出す。

茜は食費をかけた二度目の戦いに負けたのだ。

「おかしいと思ったんよ、確かに素質のある子が転入するときには試合が入試だけど：相手がなあ」

レイランからすれば、その入試の相手としてアリアと瑠璃というのは異例だと言う。

「あいつ…わざと負けたのかな…」

最初の試合の事だ。

一撃で茜は勝っている。

「いんや、それは無いと思うよ。あの時はアリアさん生身だったやろ？」

レイランが慰めで言っている風は無い。

「……じゃあなんだよあの差」

疑問に思うのも当然だ。

圧勝した相手に圧勝されているのだ。

「ん…回収の手間が無いもんな」

レイランの説明に意味が分からないといった顔で見る茜。

「中学で習ったやろ？」

「バイトして学校いってない」

ぼそっと少し恥ずかしそうに呟く。

ふうと、レイランは溜息をつき簡潔に説明をする。

自分達の魔法のような能力は正確には「冥泉を根源とする式法術での運用」という事。

冥泉という、生物に作用する不可視エネルギー源が発見されたのが一世紀前。

それを利用した戦闘方法に自分達は適正が高い、それくらいは茜でもわかる。

「あのな、感覚で茜はやっとるようだけど手順があるんよ」
そのレイランの話す手順は大まかにして

『冥泉のエネルギーを体内に取り込む』回収』』

『取り込んだエネルギーを実質的にするための』具体』』

『それを攻撃にかえる』放出』』

その三段階。

「ま、バリエーションはいろいろあるけどな」

真剣に食い入るように聞いている茜。

「じゃあなんだよあの花びら」

それが知りたい。手も足も出なかったあの花びら。

「あれか？あれは事前に回収した冥泉を処理してあるんよ」

言われて茜の頭の中にえがかれるのはただのクエスチョンマーク。

「…ま わかりやすく言うと、あれ武器や」

レイランが立ちあがる。

「よし！見せたる！どっちかいうと私はそれが専門だしな」

寮の前の中庭アリアが空中に魔方陣を描く。

キラキラとした緑色が綺麗だ。

「と…まあ、こうやって…」

ボン！

その魔方陣から光が放出されて離れた場所に置いた空き缶を撃ち抜く。

「今のが具体からの放出ね」

なにやら金属の腕輪を取り出し装着しまた別の空き缶に狙いを定める。

ボン！

今度は魔方陣無しで空き缶を撃ち抜く光。

「ほおおおお」

茜は感動した顔で見ている。

「ようは、この腕輪にある程度力が閉じ込めてあるんよ わかる？」

ようやく理解して元氣良く頷く。
その後も少し説明が続く。

何かの物質に力を貯めておく技術、レイランはそれの専門らしい。
どれだけ物質に力を貯蓄するか、それが一番難しいところ。

「ま、この腕輪だと10回くらい今の撃ったら終わりかな」

アリアはその能力がずば抜けて高いと言う、あの一度目の勝利はそれを使用せず生身での戦闘だった。

それは学園の生徒一同が一番驚いているところ。

「ハンデか…」

茜が不機嫌そうにする。

「さて、そろそろ部屋に帰るで」
外は少し寒い。

「茜」

レイランがカーディガンを渡す。

「え…」

柔らかい素材。

「見てるとこっちまで寒くなるわ、あげる」

「あ…ありがとう！」

茜は本当に嬉しそうに、自分には少しだけ大きいカーディガンを羽織る。

「大切にするよ！」

その真っ直ぐなまなざしに、レイランが思わず顔を赤らめる。

「おきてる？」

電気を消した部屋。

何故か眠れないレイランが話しかける。

「うん」

少し遅れて茜が返事をする。

「ご飯：どうすんの？」

一銭も無い茜。

衣食住の買い物を全て学園内で行えるこの施設。

皆は基本仕送り等でそれを買う生活する。

今日はレイランが茜に奢った。

「バイトする」

学園内で仕事も用意されているのは事実。

多くの生徒がそれを利用する事は無い。

基本的に資産のある人間の娘なのだ。

ただ、教育方針の一環で、仕事を行えば報酬がある事となっているのだ。

その為の資金稼ぎ、通称”奉仕”と呼ばれるシステム。

『自立心向上の為』という名目のシステムだが、実際は任意での選択によるもの。

レイランは親の方針で、さっき披露した腕輪のようなアイテムの材料だけは、

そうして手に入れてきたという経験を今日話していた。

「いい素材だとよく溜まるんよ」

嬉しそうに話す。

「あいつ：普通の花びらだった…」

それであるの威力。

それがアリアの突出した分野である事を示している。

「あとさ…」

「どうしたん？」

茜が少し恥ずかしそうだ。

「あの…空中になんか光るの描くのどうやるんだ？」
自分の戦闘で魔方陣は出たことが無い。

「茜…」

レイランもその事に今気がつく。

その驚き。

今まで陣あつての魔法だと思っていた。

見える見えないに関わらず、力を貯蓄する道具にもそれを描く。

「…あ：明日教えたる、今日はねよ。もうさすがに眠い」

少し膨れて茜が眠りにつく。

昨日もほとんど寝ていないにも関わらずレイランが寝付いたのは外が明るくなってから。

翌日

レイランが放課後訪ねたのは生徒会室。

「あの…アリアさん…」

昨日の疑問、魔方陣無しの茜の攻撃について。

「ああ、あの子の攻撃の事でしょ？珍しいわ、体内で陣を描くなんて」

嬉しそうなアリア。

「ま、だから強いわけではないけど、攻撃にいたるまでが早いわよねあの子」

そう言うとか何か難しそうな本を読む事に戻る。

「あ、その事教えなくていいわよ、私の退屈しのぎがなくなるから」
生徒会室を出る間際、アリアが茜にそう告げた。

「おせええ！」

戻ると茜が不機嫌そうにしている。

今日は校内の”奉仕”の掃除をやってきたらしく、パンを齧っている。

「はやくおしえろ！」

昨日の約束を守れと息巻く。

「あ：あのさ、えーっと。あれは手で描かなくてもいいんよ…」

アリアに言われたことを思い出し、できるだけ話をそらそうとするが上手くいかない。

「：ほら、あの一年生、足元に出てたでしょ？」

瑠璃の話をすると、茜の顔色が変わる。

「私とアリアさんみたいな理論構築型は手描きが多いわ、複雑なのを描くから…」

茜が話の途中で立ち上がる。

「あのチビ！」

拳を握り再戦を願うかのように。

「あの…魔方陣はもういい？」

ある意味ほっとしたレイランが確認をとる。

「だめ！おしえて」

目の前に座り込まれる。

「ああああ！くそう！！できねえ！！！！」

何度説明しても茜から魔方陣が発せられることは無かった。

「ま…がんばれば、できるんじゃないかな」
さすがにもう眠い。二日連続朝まで起きてるんだ。

「ううう…やっぱりメガトンパンチしかないか…」
茜がそう言う。

「メガトンパンチ？」
そりゃ気になるのも仕方ない。自分達が幼い頃の子供向けヒーロー
番組の必殺技の名前だ。

しかも、主役ではなく脇役の。

「うん！なんか気合いれて打つと超つええ！」
そういうと構えて一気に右足で踏み込む。

ドッゴオオオオオ！

「な！」

自信ありげに壊した、寮にあがる脇の塀の残骸に足を乗せる。

「ほんで次はメガトンキツ…」

茜の顔がひきつる。

「奉仕の給料から払えよ…」

その目線の先。

セシリア先生。

生活苦バイオレンス〜その1〜

「はぁ…はぁ…」

茜は一生懸命に廊下をモップで磨く。

「くす…」

その姿を見て誰かが笑う。

そんな事は馴れたもんだ。

いくら”奉仕”というシステムがある学校とはいえ食事の為にやる人間はいない。

「くす…あはは…」

嘲笑する声は大きくなる。

「…うぜえ…」

それでも無視して磨き続ける。

「だはははは！」

腹を抱えて笑われるとさすがにむかついてくる。

「おい！そんなに珍しいか！」

モップを担ぎその笑う少女に近づいていく。

「うん…おかしい…くく…あははは！」

茜を前にしてまた笑い出す。

「くううう！」

さすがに拳を握ってしまう。

「…なんで掃除なの？」

そう聞くとその少女は大爆笑に戻り、ひとしきり笑うとどこかへ歩

いていった。

「これだけ！」

夜遅くまで校内の掃除をした茜の今日の報酬は、パン一つ。

「あんたが塀を壊すから」

セシリアが睨む。

「はぁ： チビチビと外に座りパンを食う茜。」

「おかえり馬鹿」

思わずパンを落としそうになる。

今日爆笑していた少女がいきなり隣に座るのだから。

「おっ：おま」

栗毛のボブの少女。

「そりゃ掃除じゃパンだわね」

はい、と茜に渡したのはフランクフルト。

「な：くれるのか！？」

涎が出てくる。

「うん、笑いすぎたし 私はステラ」

フランクフルトを受け取り齧る。

久方ぶりの肉の味に涙が出そうになる。

「あんた授業うけないもんね」

珍しそうに茜を見るステラ。

言われるとおり、ほとんどの授業には出ず、ずっと食事の為に掃除をしていた茜。

「任意とはいえ、馬鹿なんだから勉強もしなきゃ」

この学園において、授業活動への参加は任意。

そんなとんでもないシステムだが、それぞれが自分の特性に合わせたカリキュラムを組んでいるのが現状。

「カード…作れば？」

馬鹿といわれた腹立ちと、フランクフルトの旨さに揺れる茜に言う。

「カード？」

茜が聞き返す。

翌日

茜は教室に来た。

転校してきて、二回目の教室。

クラスメイトがさすがにざわつく。

授業中にもかかわらず茜はセシリアに詰め寄る。

「セシリア！カードよこせ…ぶぎゃ！」

顔を殴られる。

「授業終わるまでまってるカス」

その気迫に渋々席につく。

授業内容は意味の分からないものだ。

はじめて聞く用語だらけで意味が分からない。

眠気に負けそうになると、終了のチャイムが鳴る。

「セシリア！！ぶぎゃ！」

また一発。

「先生をつけるボケ」

そう言う茜を教室から連れ出す。

「ほれ」

「あ…ありがとう」

職員室で難なく渡されたカード。

「でもおまえが出来る奉仕なんてないぞ掃除以外に」

奉仕。生徒が稼げる為のシステム。

基本的には、生徒同士の試合のデータのまとめや、アイテムの構築等のものばかりだ。

茜のしている掃除は、何も出来ないと餓死するとの事で特別に用意してくれたもの。

「試合に出る！」

アカネは昨日聞かされていた。

生徒同士の試合に勝てば報酬はあると。

校内で使用する通貨のかわり、それがこのカード。

「勝てばこのカードがお金になるんだろ！」

少し勘違いはしているが、このカードに溜まったポイント⇨お金と換算される。

「試合相手いるか？」

セシリアが少し心配そうにしている。

「いるいる！掃除なんておさらばっす！」

おどけて職員室を後にする茜。

一番最初にすれ違った生徒がいた。

「なあ！試合しよ！」

誘ってみる。

「いや…ごめんなさい…」

逃げるように断られる。

双方の同意が無ければ、試合はできないのだ。

その後も何人か声をかけたが皆「NO」

茜の噂は校内でひろまっいて、皆嫌がる。

『ハンデありとはいえエリアに勝つような強い人とはやれない』

『貧乏だから唾をとばしてくる』

『相手が抵抗しなくなっても攻撃してくる』

事実から脚色されたもので。

むかついてはいるが、さすがに空腹すぎて諦めかけた茜が部屋に戻ろうとする。

「お、馬鹿じゃん」

ステラだ。

言い返す元氣も無い茜が目の前を通り過ぎようとする。

「おい待ってって、試合してやろうか？」

茜の目が輝く。

勝てば肉でも食える程の報酬だ。

「明日！明日！」

試合規定の時間をすぎているのは仕方ない。

できるだけ早くと茜が催促する。

「わかったわかった！」

ステラとの試合が決まった。

翌日、一番最初に使った闘技場とは別の場所。

前より観客も少なく、少しぼろい。

「悪くないな」

ステラにとっては今までの試合の中では一番観客が多い。
相手は校内で噂の転校生なのだ。

茜とステラが中央で対峙する。

試合開始のブザー。

「おらああああああ！」

一瞬の茜の打ち込み。

「はやッ…」

間一髪、ステラの仕込んでいたアイテムが魔方陣を展開し茜の攻撃をガードする。

「やっぱり魔方陣無し…おかしなやつ…」

ステラも気になるようだ。

他の生徒が茜との試合を嫌がったもう一つの決定的な理由。魔方陣の無い攻撃をする不気味さ。

「ちくしよおおおお！」

二撃、三撃と間髪入れない攻撃。

アイテムを展開してそれをしのぐステラ。

「…こうげきしてこい！！」

いなされるだけに苛立つ茜。

撃つ、そしてそれをいなすステラ。

それが何度か反復する。

「ああ、わかった」

「そらああああああ！！」

トン…

「あれ？」

ガードせずに後ろに跳ねるように避けられ、よろめく茜。

「目の色か…」

ステラがニヤリとする。

茜が再度踏み込む。

バチュン…！！

さっきよりも強い魔法の防御壁。

「さて」

ステラの手元に小さな魔方陣がいくつか浮遊する。

「この…！」

そのまま防御壁に二発目を打ち込む。

バシ…

「おわ…！」

割れるように防御壁は消え、それが茜の拳の威力を物語る。

「くそ…ガードばかりしやがって…！」

また同じ攻撃、その速さはステラを逃さない。

また防御壁。

茜の拳が接触してぶれる。

「ん？」

目の前に浮かぶのは、コインくらいの小さな魔方陣。

ちやうど防御に使われている陣をそのまま小さくしたような。

パン！

「いた！」

鼻っ柱がそれにあたり仰け反る。

「ッ…また鼻血…」

ポタポタと足元の土に染み込む血。

「この…」

「あ、私の負けです」

「は？」

茜が再度向かおうとすると、ステラが高らかに宣言する。

「え？え？？」

試合終了のブザー。

ステラの投了による茜の勝利、とアナウンス。

「え？え？？」

理解できない状況だが、勝ったという喜び…というよりも食事にありつける喜びが茜に満ち溢れてくる。

「よし！」

よくわからないがガッツポーズをしてみたが、それに歓声は無かった。

生活苦バイオレンス〜その2〜

「うまああああああああああああああ
歓喜感激。」

カレーライスを頬張る茜は泣きそうなくらいの笑顔。
昼過ぎの食堂で、一人で食べる。

談笑する幾人かの生徒がチラチラ茜を気にするが、そんなのは目にも入らない。

「はあああああああああ」

一口食べるごとにひろがるスパイスの香り。

「にくうううううううう」

ゴロリとした肉を口に運ぶ。

「はあああああああああああああああ
ひろがる旨み。」

大切に、大切に食べる一口一口。

「皿…なめてるわよ…」

そんな周囲の声も、もちろん聞こえていない。

「ごちそうさま!」

ピカピカの皿を食堂のおばちゃんい返す。

「おいしかったかい?」

優しい笑顔。

「うん!!」

元気いっぱいの茜。

「ほら、これ内緒だよ」

ゆっくり味わいすぎて気がつけば食堂には茜だけ。

おばちゃんが余り物のバナナを茜にあげる。

「あ：ああ！ありがとう！」

嬉しすぎて少し挙動不審な茜にまた優しい笑顔を向けるおばちゃん。

「ふうふうふうふう」

バナナもゆっくり食べ終えた茜が校舎裏で煙草を吸う。

残り二本。

今日は天にもものぼる上機嫌だ。

「あら、お久しぶり」

「ひさしぶり」

茜と同じく、一服を隠れてしにきたアリアにも愛想よくこたえる。

アリアも、茜の今までと180度以上違う態度を気にした風も無く隣で煙草に火をつける。

「はあああああああ」

フィルターギリギリまで吸い尽くすと茜がアリアのほうを向く。

「試合しよ、今から！」

今日は勝てそうな気がする。

そんな顔だ。

アリアは応じた。

急な試合で観客がいなかったのが救いか。

「うげええええええ」

手も足も出ず、腹を蹴り上げられた茜が胃の中身をぶちまける。

「あらら」

アリアはそのまま踵を返して去っていく。

雨が降り始める

「うう…カレーライス…」

びしょ濡れの茜が寮に戻ったのはもうだいぶ夜中。

「…ふああ…!？」

目覚めるレイランに映る意味の分からない状況。

部屋に干された制服とカーディガン。

素っ裸の茜が床に寝ている。

「な…なにしてんの」

恐る恐る揺り起こしてみる。

「ん?…れいらん?」

寝ぼけた茜。

「なんで裸」

少し痩せ気味な体を起こす。

「いや、服一つしかないし…干してたら寝ちゃった」

レイランは溜息をつくとクローゼットをあさる。

「はい、ちよっと大きいけど」

そう言って白いYシャツと下着を渡す。

「スカートは…あった」

ちょっとほつれたレイラン達のきるこの学園のスカート。

「授業は？」

身支度を終えたレイランが聞くと茜は首絵お横に振る。

周囲の目を気にしているのかと、レイランは少し可哀想な気持ちで何も聞かず教室に向かう。

「さて：カレーライス食べに行こう」

まだ試合のポイントの残っているカードを持ち茜は、大きく伸びをした。

その晩。

茜が部屋でくつろいでいるとレイランが戻ってくる。

「おかえりー」

満腹で上機嫌の茜の横に座る。

「あんたも言い返せ！！」

いきなり襟首を掴み怒鳴る。

「え？」

茜が不思議そうに見る顔は、涙をため真剣だ。

「：くっ：私もあんまり裕福じゃないからな：少しは気持ちわかる！！」

一人で喋りだす。

「だけどこれはあんまりや！！」

そうして出された少し大きめの紙。

「：なんだこれ」

『貧乏転校生 坂崎茜の弱点見つけたり！』
大きな見出しとカレー皿を舐める茜の写真。

「……誰だ……」

久しぶりにレイランが見る茜の怒った顔。

「茜……？」

その紙を握りつぶし廊下に出て行く茜。

「だれだ――――！！！」

突如大声で叫ぶ。

「喧嘩ならしてやる！！だれだこらあああああああ」

壁を蹴り回しわめきちらす茜がセシリアに連行されていくまでそう時間はかからなかった。

「茜」

レイランの心配は、周囲に蔑まれている事だけではない。

その紙に書かれているのは、ステラとの勝負の詳細。

『坂崎茜は攻撃の前に目の色が少し変わる、攻撃を打った直後は防御も無く弱い』

そんな一文。

「や・・やめとき茜！」

必死に止めるが聞かない。

試合を申し込んできた相手は校内でもそれなりな強者。

「いいよ」

教室での話。

「書いてあったとおりだな」

茜の攻撃直後に、その魔方陣は展開された。
三枚も貼られた防御壁を突き破った拳をしっかりと捉えているその陣。

「あ…」

力が入らない。

「それ、強制放出の陣な、覚えといて…どうせできないだろうけど」

「あかん…」

レイランが観客席で頭を抱える。

強制放出。

丸い陣の淵がバチバチと電流が走るように光る。

茜いわく『気合を入れる』ようするに第一段階の”回収”で体内に貯めた力の源”冥泉”を強制的に放出する高度な陣。

「うそ…だめだ…」

ピクリとも動かない腕。

「負けだよ、転校生」

茜の目の前え悠長に描かれる魔法陣。
それがゆっくり茜の周囲を取り囲む。

レイランが目を覆う。

生活苦バイオレンス〜その3〜

「おはよう、まったく良く寝るわね」

茜が意識を取り戻し一番最初に見たのはアリアの顔。
微妙な寝覚めに不機嫌そうな顔。

「…はら…」

異常な空腹を訴えようと思ったが、すぐ後ろのレイランの半泣きの顔を見てやめる。

「まったく…弱点もなにもないのに負けて」
呆れたように言うアリア。

「弱点…しょうがないじゃん……」
弱気な茜。

「弱点なんて無いっていつてるじゃないの」
「お…おい!!!!!!」

アリアが茜をベッドから引きずり降ろし廊下に連れて行く。
他の生徒がその光景を珍しそうに見ている。

「さて…」

中庭で中空に魔方陣を描きだすアリア。

「陣は大きくわけて二つのタイプ、私とかレイランみたいに計算式を立て組むのと…」

見に来た野次馬達もその美しい陣に見惚れてしまう。

似たような説明をレイランにされたのを思い出す。

「そしてあなたのような直型」

描いた陣は細かい粒子となり消える。

「私それできないもん…」

完全にふてくされている茜。

「体内にあなたは陣を出現させてるのよ？」

あつさりと、レイランに口止めした事を言う。

レイランは元より見ている人間まで驚く。

「目の色ねえ、まあその光が見えているのでしょう」
通常、陣は何かしらの色彩で発光する。

それが体組織としては薄い眼球のところだけこぼれている、それだけの事。

「でも…ばれてるし…」

それでも拗ねたままの茜。

「あのね…」

アリアが近づいても無視したまま。

バチチチチ!!!

「いったああああああ!」

茜を取り囲み火花を散らしたのは、先程消えたはずのアリアの青い陣。

「陣にはね? いろんな使い方があって。そりゃもうたくさん、あんたは無学すぎるのよ」

抵抗する意思も無くへたる茜。

「授業をうけなさい、卒業できないわよ?」

その一言に目の色を変える茜。

「そ…嘘?」

異様に驚いている。

「あたりまえよ、勝てない馬鹿に何が出来るの?」
茜が立ち上がる。

「が! がんばる!」

それを聞いてアリアはその場を後にする。

「ね…レイラン、なんでアリアさんが…」

同級生がレイランに聞く。

生徒会役員であるアリアは、別の寮を使っている。
こんなところに来るのは異例だ。

「いや、わからんのよ」

レイランも同じことを思う。

試合で意識を消失した茜を部屋に運ぶと、アリアが待っていたのだから。

ドサ：

突如茜が倒れ、レイランが駆け寄る。

「あ！茜！！だいじょ…」

顔色が悪い。

「レイラン…お腹すいた…」

約三日、茜が目を覚ますまでの時間。

「あら、今日はカレーじゃないの？」

一番安いパンを注文した茜に食堂のおばちゃんが聞く。

「うん…節約」

少し寂しそうに茜が言う。

「はい」

おばちゃんは今日も残り物のバナナを茜に。

「あ…ありがと…」

少し元気が無い。

「どうしたの？」

さすがに心配している。

「うん…卒業できないかも」

パンを食べながら落ち込み気味の茜。

「茜、大丈夫だって、今からがんばろ」

レイランが励ます。

「うん…」

食べる手が止まる。

「あ、明日私は午後からだけど、わからんところは教えるから！」
一生懸命なレイラン。

「あら、こういう風の吹き回し？」

翌日教室にきた茜にクラスメイトが言う。

それを無視して席のほうに歩く。

クスクス笑う声が聞こえる。

「…」

机の上にはバナナの皮がどっさりと置かれている。

それを床に落とし、椅子に座る。

「あら、ゴミは散らかしたらだめじゃない？」

誰かが言うのと、クラス中が爆笑する。

「…っ…」

悔しいがそれをゴミ箱まで運ぶ。

「臭い臭い」

また誰かがそう言う。

「う…う…」

「やめなさい！」

その嘲笑をとめる声。

本当に救われた気分だ、なんだか前向きな気持ちが茜の中で一瞬湧

き上がる。

「そんな事言うと、あとで坂崎さんがバナナの皮を食べずらいでしょう？」

同じ声、一同がまた爆笑する。

机を離されて教室で孤立した茜を気にせず授業は開始する。

今日は知らない先生だ。

皆ノートをとり真剣に聞いている。

何も無い机。

茜は、自分には難解な授業を聞くだけの時間。

コン…

何かが後頭部にあたり振り向く。

落ちているのは消しゴムの切れ端。

授業に集中しようとまた前を向く。

コン…

また同じ。

耐えて無視をする。

コン…コン…

コン…

コン…

バシッ！！

何か大きなものが頭に当たる。
教室が笑いに包まれる。

「……」

バナナの皮を誰かが投げたのだ。
ベトつくそれを手に取る茜。

ドガッ！！

「きゃ……」

自分の机を蹴り上げ外に出て行く。

「あれ？茜は？」

午後の授業を受けにきたレイランが聞いてもだれも答えない。

「はぁ…はぁ…」

校舎からだいぶ離れた森。

太い木を殴り続けた結果、拳に血がにじむ。

木のほうもだいぶボコボコだ。

「くそ…」

その場に座り込む茜。

「お父さん…」

木々の葉の揺れに呟く。

哀愁サタデーナイトとその1

学園で決められた休暇もある。

あれから授業も受けず寮から出ない茜。

レイランも声をかけられない。

「だああああああああああああああああああああ」

驚いて珈琲をこぼすレイラン。

「な……なんやの……」

そのまま茜は駆け出していた。

「アリアーリーリーリーリーリーリーリーリーリーリーリー！」

生徒会用の寮。だからといってとりわけ豪華なわけでもない。そんな前で大声で呼ぶ。

「なによ…」

不機嫌そうに出てくるエリア。

「ライター貸して！」

寮から離れた木陰でゆつくりと一服する。

「残り一本！これをあげるから強くしてくれ！」

茜がアリアに頭を下げる。

「…クス…」

思わず笑みがこぼれるアリア。

「じゃあ、まず今夜の試合を見に行きましようか。」

一番最初に使った、校内で一番大きな闘技場。
客席は満員。

アリアと茜のツーショットに席を譲る生徒。

「なんだよ…見ても強くなんて いてえ！」

周囲の生徒が、アリアが拳を使うのを見て驚愕する。

あの茜に負けた試合といい、憧れる生徒も多いアリアの奇行は今や校内の一番の話題とはいえ、目の当たりにしてショックなのか、その場を離れる生徒も出だす始末。

「ん…あのチビ！」

今日の試合。

三年生の生徒と、一年の瑠璃。

何をされたか覚えてないくらい完璧な負けを茜に与えた因縁の相手。

「あの三年生は校内序列17位、瑠璃ちゃんは28位よ」

校内での強さのランクだろう。

試合開始のブザーが鳴る。

「なんだあれ…」

三年生から出現した魔法陣。

アリアとは違い、足元からひろがるそれ。

「あれが直型、簡単に言えば呼吸のように陣を出す事、ま、なかなか

かの速度よ」

それと同時に、手を動かし中空に描かれていく陣。

「あれが私の見せたもの、組み換えてより強化した業に繋ぐの」
茜に丁寧な解説していくアリア。

「……チビは何もしてないぞ？」

瑠璃はその言葉のとおり、立ち尽くすだけ。

「びびってるのか……」

茜がそう言った刹那、三年生が動く。

轟音と強い光。

一瞬眩んだ目の先に倒れているのは三年生。

「な！！！なんだよあれ！！」

茜が驚くのも仕方ない。

一瞬で相手を屠った瑠璃の周囲。

足元、中空 体よりも随分と大きな黒紫の魔法陣がいくつも出現している。

試合終了のブザー。

瑠璃は立っているだけ。

周囲の魔法陣は小さくなり消える。

「おい……説明しろよ！」

茜の声を掻き消すように次のブザーが聞こえる。

一晩で7人の挑戦者を、何も動かず倒した瑠璃。

「三園瑠璃 校内序列9位昇格」

アナウンスがその日を締める。

「あれが直型！すごすぎないか！？」

「そうね、あの子は天才ね」

直型の陣は、出現すらはやものの単純な攻撃が多い。ただ一度にあそこまで大量の陣を出せば、話は違う。可能ならの話だが：

「普通はいろいろと組み合わせで戦うのよ」

通常、式を組んで中空に描く”構型”と呼称されるものより展開が速い。

それ故に単純。

「ま、あなたは究極の直型のようなものよ」

体内に陣を出現させていると言われている茜。

「単純：だから負けるのか…」

マジマジと自分の拳を見つめる。

「馬鹿だから負けるの」

「なんだと！」

茜が立ち上がる。

「元気になったじゃない」

アリアが立ちあがる。

「あなたは強くなるのが難しいわ、不器用すぎる。私の使うような道具も扱えない」

ばら撒かれるバラの花びら。

思い出し足がすくむ。

「いい？自分の特性をうまく使わないと、私でもあなたに負ける」
瑠璃を青の魔法陣が囲む。いつのまに描いたのか。

「私は構型しか大して使えないわ」

背中に伝う冷や汗。

「ただこれだけの道具、そして構築された陣の透明化ができるから、私の学年序列は3位なのよ？」

手を振るアリア。

「……」

怯えてうずくまっている自分に気がつく。

回りを囲っていた陣も、花びらも無い。

「茜、怖がってはだめ。あなたでも扱える道具を用意してあげるわ」

寮に戻るとレイランが駆け寄ってくる。

「よかったな！アリアさんが仲良ければもういじめられへんよ！」

闘技場で一緒にいた件を耳にして嬉しそうだ。

「そんなんじゃないよ」

茜は肩に乗せられた手を払い、ベッドに潜り込む。

「あ…茜…」

そこから数日会話は無かった。

遅い時間に戻る茜はすぐに寝る。

気まずさがレイランの口を塞ぐ。

「さて、今日はこれくらいね」
土が顔についている茜はもう立ち上がれない。
アリアに稽古をつけてもらってからもう一週間。
手も足も出ないのだ。

「いつ…くれるんだよ道具…」
茜の気持ちは”アリアが今作っている茜でも使える道具”に期待してしまっている。

道具は扱うのに、いくら小さなものとはいえ、陣を組んで発動させたりする手間があり、茜ではできない。

最初の三日で、道具で何も出来ない自分を叩き込まれた。

「時間かかるのよ？」

茜のカードのポイントは残り少ない。

パン生活で力も出ない。

「なあ…茜…」

レイランが話しかける。

アリアとの訓練の噂も加えて、誰も茜を後ろ指ささなくなっていた。
た。

「ん？」

先日の一件を気にして話しかけるのに勇気が入用だったレイランに
対し普通の顔で答える。

「あ…あのさ！この前はごめんな！」

「何が？」

何も気にしていない。

堰を切ったようにレイランがいろいろと聞く。

「ほう：茜でも使える道具をアリアさんが」

「うん！それなら勝てる！！」

茜にはアリアの道具の凄さは嫌というほど体感でわかっている。

「ええなあ：一流すぎる：」

アリアと同じくして道具使いのレイランが羨ましさ半分で褒める。

「なくレイラン、道具ってどうやって作るんだ？」

「こうやってな：」

レイランが鉄の腕輪の周りに何重もの魔法陣を出す。

額の汗が、その疲労を物語る。

「よし：うまくいきそうや」

パシユン

光が全てその腕輪に吸い込まれる。

「ふうう：つかれたわ」

額の汗を拭う。

何も文様がなかった腕輪に陣と同じような模様が入る。

「ほれ、茜あげるわ」

レイランがそれをポンと茜に渡す。

「え：でも使えない：」

茜にそれを発動させる事はできない。

「わかつとる、お守りや！」

親指を立てて見せるレイラン。

「うん！」

右腕にそれをつける茜。

翌日、勝手に試合を組んだとアリアが伝えにきた。

「道具も当日渡すわ」

それだけ言って帰っていく。

茜はその晩眠れなかった。

闘技場控え室。

「道具は…鍵がないと発動しないですよね…」

アリアにレイランが聞く。

鍵というのは道具に対しての陣の種類。

複雑な陣を閉じ込めて、それに対しその鍵を使い力を引き出す。

アリアほどの達人であれば、その鍵は透明にて複数、そして遠隔操作も可能だが、そう容易ではない。

「まさか…」

一応鍵無しで使えるものもある。

陣等の冥泉エネルギー全てを鍵とした、触れたら発動する火薬のようなもの。

「そんなものを使わないわ」

危険故に学園内での仕様は禁止されている。

「じゃあ…なんなん…」

見ればわかるといったように不敵に笑うアリア。

茜は闘技場の中央で相手を待っている。

哀愁サタデーナイト〜その2〜

「おまえは!!」

茜の対戦相手、自分をボロカスにした”強制放出の陣”の使い手。

「また稼がせてもらおうわね」

試合開始のブザー。

「ど…どうしょ…えっと…」

前回の恐怖が抜けない。

殴りかかった瞬間に、捉えられた。

いわゆる直型。何も無かったはずのところに陣が急に現れていたという印象。

動けない茜に余裕を持ち、相手は、描くほうの展開をはじめる。

「やばい…やばい…」

焦る茜。

自分が撃ち込まなければ捕まらないとしても、陣を展開されて撃たれたら意味が無い。

「あああああああ!めんどくさいっ!!」

諦めて茜が突っ込んでいく。

「馬鹿ね、また捕まえる… うわ!!」

目に映るのは空。

「あれ？」

相手を一撃でぶっとばした茜が驚いて自分の拳を見る。

特に変わらない、いつもどおり傷だらけの小さな拳。

「この…油断し…」

起き上がり構えた時目前にあった茜の拳。

「はや…」

「そりゃ、私の相手をしてればあの程度の展開速度より速くなるでしょう」

アリアがレイランに少し嬉しそうに言った。

「でも…道具使わなかったですね」

少し興味はあった。どんな道具なのかと。

「大丈夫よ、次はそれなりに強いわ」

次の相手の『序列17位』瑠璃の対戦相手だった三年生に対して茜は怯まなかった。

さっきの勝利が自信を取り戻させたのだ。

「ぐあっ…」

その過信が土を舐めさせる。

「ちょ…ちょ うそ!!」

うつ伏せに倒れている地面が光る。

「つあああああああああ」

開始数秒。茜が高く跳ね飛ばされ そして落ちる。

「いてて…うわ…」

気がつけば周囲を取り囲んでいる陣。

「うそ…」

ドドドドドドドドドド…

土煙に消える茜の体。

「タフね」

今までの攻撃の間、しっかりと描かれた大型の陣。

「やば…」

土煙を全て吹き飛ばす程の、風圧が陣を中心に広がる。

「茜!! あんなのくらったら!!」

レイランが叫ぶ。

それ程までに大型で緻密な陣。

描くのに時間を要しただけあるその前にエネルギーの弾が現れる。
その陣と同じサイズの光は、眩しく目を覆うほど。

ゴ…

その音はもはや地鳴り。

茜の体より大きな光線が走る。

「セキュリティーギリギリね」

闘技場の周囲はそういった事故を防ぐ為、力を消す陣で囲ってある。
それすらビリビリと揺れているくらいだ。

「はあ…これであの瑠璃も…」

そんな強力な一撃を放った生徒の頭にあるのは、茜などではなく、
自分を負かした一年の瑠璃。
そのためにこの陣を組んだ。

パン…

彼女の両腕の腕輪がはぜる。

道具と自信の力のあわせ技、それである威力。

観客は声も無い。

「はあ…はあ…　なんとか…」

誰もが目を疑った。

茜が立っている。

その体を真つ赤な陣が囲って。

「茜!」

正直死んだかと思うほどの一撃からの生還にレイランも歓喜する。

光るというより、暗くよどめく赤の陣。

「うそだろ…」

己の力を相当こめた一撃だったのに。

「あ…もうだめ…」

茜が倒れる。

バシャっ……

陣は消えること無く、ただその形状を保てず地面に広がる。

「血…」

茜の体の回りを塗らす、真っ赤な血液。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1750p/>

Discrimination

2010年12月2日14時52分発行